

月刊ウィーン

GEKKAN-WIEN

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊 25 年目

創刊 1989 年 Nr. 290

2013年8月号



Jan Thomas (Ypern 1617 - 1678 Wien)
Infantin Margarita Teresa (1651-1673)
Kaiserin im Theaterkostüm
1667
33,3 x 24,2 cm
- RHM mit AVK und OTM



杉本純の原子力の話II ウィーンと京都 23



七月一日〜五日まで、国際原子力機関（IAEA）主催による核セキュリティに関する初めての閣僚級会合がウィーンで開催された。「核セキュリティ」という言葉は日本では、般にまだなじみがないが、盗んだ核物質を使ったテロ攻撃、原子力発電所そのものの占拠など、原子力に関する安全保障（セキュリティ）をさす用語として近年多用されている。この会議は、核セキュリティ強化のための国際社会における近年の成果を総括し、今後の中長期目標と優先事項についての見解をとりまとめることを目的として開催された。二五ヶ国及び二国際機関・団体から約千三百人の参加があり、我が国の鈴木外務副大臣を含む三四ヶ国から閣僚レベルの出席があった。

鈴木副大臣の演説では、福島第一原発事故で得られた教訓をテロ攻撃とそれに伴う事故対応に活かしていくため、加盟国と情報共有し国際的な核セキュリティ強化への

の貢献を訴えた。国際的取組みでは、二〇一〇年末に日本原子力研究開発機構に設立された核セキュリティ総合支援センターにより、アジア諸国の核不拡散・核セキュリティに関する能力構築支援を行っており、今後も貢献の継続を約束した。会議では、すべての加盟国が核セキュリティ関連活動における関与が必要なことなど二四項目からなる関係宣言を採択した。本会合に関連して、千崎核セキュリティ総合支援センター長らが出席したワークショップがウィーンで開催されたので、その模様を編集部により欄外に紹介していた。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市と映画との関連について述べてみたい。ウィーンを舞台とした映画は、「会議は踊る」(第三の男)、「アマデウス」を始め、牧挙にいしまがない。中でもグレム・グリンワール原作的「第三の男」は、第二次世界大戦後、米英仏ソ四ヶ国による分割統治下にあったウィーンを舞台とする名作である。プラター公園の大観覧車中でオーソン・ウェルズが「イタリヤはボルジア家の圧制のもと、戦争、テロ、殺人、流血に三〇年間悩んだが、ミケランジェロやダ・ビンチ、そしてルネッサンスを生んだ。スイスでは同胞愛の旗印のもと、民主主義と平和を五百年間守ったが、ハト時計を生んだだけ」と悪の哲学を語る場面が印象的である。真さんシリーズ唯の海外ロケがウィーンであることにも注記する。

万、京都を舞台とした映画も「羅生門」、「新撰組」、「陰陽師」などこちらも枚挙にいとまがない。そもそも

大観覧車



も京都は明治三千（一八九七）年、映画の試写に初めて成功した我が国映画発祥の地である。時代劇のロケ地として優れていたこともあり、多くの映画会社が京都に撮影所を置き、次第に太秦周辺へと集中した。九五〇年代の時代劇最盛期には、大森邦規は大変な賑わいを見せ、「羅生門」を始めとする数々の名作が京都で撮影され、映画は京都の大文化産業へと発展した。その後、テレビやビデオの普及とともに映画館離れが進み、現在は松竹と東映の撮影所二カ所だけとなったが、映画ばかりでなく、テレビやCMの撮影が今なお活発に行われている。

余談であるが、筆者はウィーン赴任中、第三の男博物館を訪れ、大観覧車に乗って感慨に耽つたものである。京都の学生時代には映画をよく観たが、最近はずっと観ていない。しかし、女優の宮沢りえがNHKの大河ドラマ撮影のため筆者の自宅近くのマンションに数ヶ月前まで住んでいたと聞いた時は、流石に京都と思つた。両市の映画に關する貴重な体験ができた幸運に感謝しつつ、大観覧車を描いたスケッチを掲載させていた。

■ 杉本純 京都大学教授／元原子力機構ウィーン事務所長 ■



核セキュリティ閣僚級会議 (c) IAEA